

ほう おん こう

報恩講



伝統儀式ピックアップ

がい け ひ はん

改悔批判

「わろき心中を
がい け さん げ
改悔懺悔する」



「改悔批判」は、本願寺第八代蓮如上人の時代に、非常に大切な儀式として取り入れられ、相続されてきました。その起源は、蓮如上人とお同行が膝を交えて、お念仏のころについて夜通し徹底的に議論(談合)したことにあると言われています。

報恩講は、法要にただ参詣するだけでなく、「わろき心中を改悔懺悔する」、すなわち私たちの日頃の心をお念仏の教えに照らし、見つめなおすことが大切なのです。

名古屋別院では、報恩講期間中(12月13日~18日)の13日・14日・16日・17日の連夜後(午後3時30分ごろ)に、「改悔批判」がおこなわれています。

真宗大谷派名古屋別院

〒460-0016
名古屋市中区橋2-8-55 TEL: (052) 321-9201 FAX: (052) 321-3184
東別院ホームページ「お東ネット」



www.ohigashi.net/

お東ネット

検索

Facebook www.facebook.com/ohigashi.net

UD FONT
by MORISAWA

見やすいユニバーサル
デザインフォントを
採用しています。

(通信欄)

17.10.06.10000

しん らん しょう にん

親鸞聖人略年表



| 西暦(和暦) | 年齢 | 事柄 |
|------------|-----|---|
| 1173(承安3)年 | 1歳 | 誕生、父は日野有範。 <small>ありのり</small> |
| 1181(養和1)年 | 9歳 | 青蓮院で出家。比叡山で20年間、 堂僧として修行。 <small>しょうれんいん ひえいざん どうそう</small> |
| 1201(建仁1)年 | 29歳 | 比叡山をおりて、六角堂に参籠。 法然上人と出遇い、専修念仏に帰す。 <small>ろっかくどう さんろう であ せんじゆねんぶつ き</small> |
| 1204(元久1)年 | 32歳 | 『七箇条制誡』に「僧綽空」と署名。 <small>しちかじょうせいがい そうしゃくくう</small> |
| 1205(元久2)年 | 33歳 | 法然上人より「選択集」の書写を許され、 上人の真影を図画する。 <small>せんじやくしゅう しんがい ずえ</small> |
| 1207(承元1)年 | 35歳 | 承元の法難。専修念仏の停止、 越後(新潟県)へ流罪となる。 <small>じょうげん ちようじ</small> |
| 1211(建暦1)年 | 39歳 | 流罪を許される。その後、関東に赴く。 <small>おもむ</small> |
| 1214(建保2)年 | 42歳 | 上野国佐貫(群馬県)で「三部経」 千部読誦を發願、やがて中止。 常陸(茨城県)へ向かう。 <small>こうずけのくに さぬき とうぶつがん ほんがく じょうり</small> |
| 1224(元仁1)年 | 52歳 | 『教行信証』草稿本が完成。 60歳頃、京都に帰洛する。 <small>きょうぎょうしんじょう そうこう きらく</small> |
| 1248(宝治2)年 | 76歳 | 『浄土和讃』、『高僧和讃』を著す。 <small>じょうど わさん こうそう わさん あらわ</small> |
| 1250(建長2)年 | 78歳 | 『唯信鈔文意』を著す。 <small>ゆいしんしやうもん い</small> |
| 1256(建長8)年 | 84歳 | 息子・善鸞を義絶。 <small>ぜんらん きぜつ</small> |
| 1257(康元2)年 | 85歳 | 『一念多念文意』を著す。 <small>いちねん たねんもん い</small> |
| 1258(正嘉2)年 | 86歳 | 『正像末和讃』を補訂。 <small>しょうざうまつ わさん</small> |
| 1262(弘長2)年 | 90歳 | 入滅。 |



恩徳讃 おん じく さん

私のかえるところ

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし にょらいだいひ おんじく みをこにしてもほうずべし

師主知識の恩徳も ほねをくたくたくでも謝すべし ししゅちしき おんじく ほねをくたくたくでもしゃすべし

私は、真宗のお寺に生まれましたが、「真宗」について何も知らないまま大人になっていました。どんな価値観で育ったかといえば、家庭でも学校でも道徳や常識、そして「家の子は…」 「家の学校の生徒は…」 といった世間体もありました。こうして育った私は、保育でも「道徳的な子、常識のある子を育てる」、言ってみれば「良い子を育てる」ことに向って二十年間頑張っていました。

そんな私が「真宗保育」という勉強を通して、「真宗」を識ることになりました。その勉強会でまず聞いたことは、「真宗とは、真実を宗(依り処)とする。その真実は、どの時代にも、どの国にも通用する。道徳や常識は、その時代やその国の都合で考えられたもの。誰にでも通用することではないので、真実とは言えない」という話でした。時代や国を超えて共通する事柄など、私には見当もつかないことでしたが、これだけば間違いないと安堵した気持ちも今でも覚えています。

このように、期待して始まった勉強会でしたが、保育者の実践報告を聞いた講師の先生方からは、「良い子は、大人にとって都合の良い子なのではないか」「善・悪を決める基準は何か」等々、問い返されました。当初は、「物分かりの良い子にして、何が悪いの！ 善いこと、悪いことなんか決まっているでしょ…」と反感をもちましたが、二、三ヶ月するうちに、絡まった糸がほぐれるように、そんな感情も収まっていききました。そうした出会いから、二十年ほど経った頃、「恩徳讃」を唱う度に、「身を粉にしても報ずべし」「ほねをくたくたくでも謝すべし」と、すさまじいほどの表現に一体何をどうしたら、そういうことになれるのか、と考えていました。

そんなとき、ある先生が恩徳讃について「私たちに悔いなく生きてほしいという願いの中で、アマダさまがこんなにご苦労をしてくださっているのだ」と話されました。「自分が出会う縁は、自分だけのもの。それとしっかり向き合って、自分の一生を全うしてほしい」と、アマダさまが身を粉にするほど、ほねをくたくたくほどの願いをかけてくださっている…という受け止めです。

それ以来、「恩徳讃」は、縁をより好みしている自分に気づかせてもらう唱になっていくのです。